

## 國吉 真一 くによし しんいち (那覇地区漁協)

1936年(昭和11年)、那覇市垣花で生まれる。77歳(2013年時)。

那覇市垣花は深海一本釣業を営み、戦前は尖閣諸島で操業していた。氏は14,5歳から父親と沿岸で一本釣を行う。20歳(1956年)で、第三五眞丸(15ト)を建造し、これを機に尖閣諸島に出漁、冬期の主要な漁場として操業する。30歳(1965年)には、徳豊丸を建造、一本釣からマグロ漁に切り替え、近海マグロ、遠洋マグロ業に従事、69歳で漁師を引退。氏の体験は1950~60年代の尖閣諸島における一本釣漁業を知る上で貴重である。



### 那覇地区、一本釣船 一番多かった

僕は、終戦後、学校を途中でやめて、14,5歳には、親父と一緒に漁に下りて、18歳(1953年)には親父や従兄弟達と一緒に株やって、自分の船持ちました。それが第一五眞丸(5ト未満)で、これが小さいからと親父に持たして、そのあと20歳(1956年)には、第三五眞丸(15ト)を造って、これからが尖閣列島には行きました。機関長や船長したりして。

那覇地区が深海一本釣は一番多かったです。アメリカの援助でガリオア船ができて、1949年頃ですか、あの頃殆ど一本釣りでした。免許はカツオも一緒ですが、20,30隻位あったはずです。僕は生い立ちからここ那覇地区の所属船ですよ。ここで若い時からずっと一本釣をやって、尖閣列島には20から30



那覇地区漁協の深海一本釣船。1960~70年代には3,40余隻で賑わっていた。(那覇市歴史博物館提供)

まで10年間、ずっと向こうに、マチ釣りに行ってましたから。そのあと、30歳(1956年)には、徳豊丸(19ト)を新造して、マグロに切り換えて、沖縄近海からフィリピン近辺まで、また大型船一孝丸を新造して、赤道近くまで行ったですよ。69歳に脚を痛めて、漁師は辞めましたから、もう遊んでから5年ほどなります。僕が一本釣釣りで尖閣列島行ったのは50年以上前ですが、憶えています。向こうはいい漁場ですよ。魚の宝庫です。もう向こう行ったら、よう満船して来ました。

### 1 航海 3,4ト水揚げ ひと月 3 航海

那覇地区漁協は、深海一本釣りが中心で、尖閣が主な漁場でしたから、ずっと向こうへ行ってましたねえ。あの当時はびっくりするほど魚が獲れましたよ。1週間では3トから4ト、5,6千斤位は積んできたから。向こう行くには、往復で一昼夜半、30時間ほどかかります。向こうに着くと、魚はびっくりするほどいましたから、3日ほどで船のいっぱい獲れました。3,4トを水揚げして5日間で帰れました。航海日数は平均して1週間で行って帰って

くる位で、仕込みとか、計算とかあるから2日位は家にいますから、普通天気がよくて、ピストン航海して、ひと月で3航海位でしたねえ。あの頃は船の装備もないから船員は多かったです。第三五真丸は7名位乗りましたが、大体は5,6人で行きました。ここの泊港からですねえ。尖閣で獲った魚は、アカマチ(ハマダイ)とか、もう深い所は、浅くなって行けば、フチミーグワー(大陸棚縁辺部)から上がっていく所では、シルシチュー(シマアオダイ)とか、ミーバイ(ハタ類)もいるし、クルキンマチ(ヒメダイ)もいるし、いろんな魚がいます。



正月の晴れ着姿で子供たちの記念写真。左が第三五真丸(15ト) 1960年頃か ((那覇市歴史博物館提供))

浅瀬はシチューマチ(アオダイ)とか、マーマチ(オオヒメ)とか、いろいろ獲りました。

### 冬場、潮が歩かん時 尖閣へ行く

一本釣りは、季節は問わないです。年中行っているわけですが、冬の時期がいいです。夏場は潮が激しいから。潮の流れが速い時は、別の場所に移動したり、宮古、八重山とか、また宝山ソネとか、この辺を歩いたりして。また潮はとまるという時は、あっちへ行くんです。それに夏場は台風時期だから避けるんですよ。発生して逃げてくるのに30時間はかかります。宝山とか、宮古・八重山とかでは5,6時間ではすぐ港に入れますから。

気象とか、小潮大潮との絡み合いとか計算して見るとやっぱり冬場が一番多いですねえ。

もう台風が出ない前まで行きます。大体10月位から行って、翌年の2,3月位まで歩けるなあ、大体半年位ですねえ。

尖閣では潮の流れが速いですから、潮だまり(干潮時)の時は、漁はものすごくいいんです。それで大潮・小潮考えて行きます。今小潮だから潮は歩るかんだろう、今大潮だから、流れは速いだろうと、これを計算して、漁には行きます。向こうへ行って運悪くシケて、1週間、長くても10日間碇泊してもおさまらない場合は、すぐ帰って来ます。季節によって尖閣が荒れる時期は、宝山ソネとか、八重山のクボウの西側とか、水納島のツリーグワーとかに行きました。当時は宮古、八重山近海でも大部獲れましたから。

### 情報聞いて 向かわせる

尖閣へは、船はいつも一緒に行きません、大概交互に行きますから、情報を聞いていい時は、向かわせます。皆無線機もっていますから、もう無鉄砲には行かないですよ。

あれだけの船員を使いますから、先発隊を入れて行きます。どんなか、どうか、潮はどうか、いいよと言ったら、向かわして。ああ、駄目よと言ったら、別の漁場に変えます。合い船、僚船で行く場合もあります。1隻で何かトラブルが起きた場合、船員の怪我とか、船で

パイプが切れたとか、燃料が少なくなって補給とかいろいろありますから、大体2隻か、3隻で行きますねえ。

向こうで、操業している船は、常時5.6隻位はいましたかねえ、もっといたかも知れませんが。海は広いですから、もう見えない所でも操業していますから。それに他の単協の船が大概1,2隻はいますねえ。宮古や八重山から、糸満から来た船もいますから。向こうでは那覇地区の船が一番多かったです。また、海ではねえ、互いに情報交換しますよ。聞かれたら答えないといかんし、情報交換して、どんなか、どうかを聞いて、漁をします。

### シケたら 島陰に 夜が明けると 避難船いっぱい

もう海がシケると、地元の船のほかに、内地船も、台湾船も、よう来ました。よく一緒に避難しよったんです。クバシマ(魚釣島)の島陰に。もう北の方からシケると南側に廻って避難します、南からシケると北側に行って。もうここは皆の避難場所になるわけです。

違う所で操業していても、昼なんか見えん場合もありますから、シケてきたらここに皆集まって来ます。あっちこちらから、東シナ海ではもうここしかないわけですから、尖閣列島しか避難する場所、風をよける島陰はないですから。もう夜が明けてみたら、もういっぱいになっていましたねえ(笑い)。いつの間にここへ来たのか、地元船、内地船、台湾船が。クバシマの島陰は、風下になって風が来ないですから。でも、時々風が強いもんだから、皆アンカー入れて碇泊していて、そのアンカーが掛からんで流れて、他の船のアンカーに引っ掛かって、もう夜から大騒ぎしましてねえ。アンカー揚げて、入れ替えて流れて、また引っ掛けて、これを夜通しやったこともありますよ。

内地船は、大体が一本釣やカツオ船、サバ船でしたねえ。台湾船はマンビカー(シイラ)とか、あの浮いている魚を獲ってました。小さいトロール船もいたんだけど、台湾船は大体がサメを釣って歩くんです、ヒレは取って、胴体は捨てて、ヒレだけを持って帰る(笑い)、高級料理ですから。今でも大丸、宝山ソネでやっているはずですよ。たまには、一本釣り船もいましたね。シチュウマチとかマーマチ釣とか、一緒にやったこともありますよ。

### 百尋線のフチミグワ いい漁場

尖閣列島では海の深さによって魚の種類が変わるわけです。100メートル以下はマーマチとか、シチューマチとか。で、アカマチは落ちますねえ、元々アカマチは200から300メートルの所にいますが、尖閣では150メートルから170メートルの所でも食います、浅い所でも釣れます。

(海図を広げて)、こっちは周囲全部やります、この3つの島の周り。一本釣りですから量を獲るためには、深い所で釣れない場合は、また浅瀬でやったり、こっちで食わなければ、また移動して、あっちこっちに移動して、全部廻ります。それに、こちらは潮が強いですから、潮の流れによっても、場所を替えて移動して行きますねえ。この大陸棚のラインに沿って上がった内側は浅いですから、シチュウマチとか、マーマチとか、いろんな魚が食います、外側は急に落ちて深くなりますから、アカマチが釣れます。

この大陸棚の落ちるラインをフチミグワー(大陸棚縁辺部)といいます。この崖の所はすごかったです。大きなアカマチが釣れます。この上の方は、また上の方で、シチューマチとか、ヒラマチとかがいっぱいいますから。フチミグワーはいい漁場ですよ。

ヒラマチの大きくなったのをロンコウと言いますが、百和クラスになるともう若者 2 人で担ぐのは精いっぱいです、あの時分は、あんな大きなロンコウが獲れましたが、今はもう見たことがないですねえ。

### 魚探ない時 海の深さ オモリ入れて測った

僕らが一本釣をやり始めた頃は、魚探もなかったですねえ。船に海図がありますから、出発点から目的地までコンパスで測って、何マイルあるから、船は時速何マイル出るから、風や潮の流れも判断して、大体何時間かかるからと計算して行くんですよ。もう船はそろそろ目的地に、ポイントに来たからと、夜でも昼でも、すぐ起されるんですよ。

「チートゥ(オモリ) イリレー(入れろ)と」と言って、ホントにその場所に来たかどうか、海の深さを測りなさいとねえ、その時はエサもかけないで、オモリ(錘)だけ付けて、縄を下ろすわけです。この縄には印されているので何尋と分かりますから、縄は流れがあると幾らかもたれますから、この時は真っ直ぐなるまで船をゴーウェイして、あっちで真っ直ぐなったら止めて、測らすんですよ。で、何メートルあると、そうしたら、海図を見るんですね。いや、まだ深い、もう少し浅いとか、目的地から外れている、いや近くにきている、とか言うて。もう間違っていたら、何回も、できるまで、やり直しですよ。潮の流れで外れていたら、1回アンカー入れて操業してみると、潮がどの位流れているかは分かるんですね。南に潮がどの位ひいているから、北寄りに何マイル持っていけば、ポイントの位置に行くとかして、こんなして船を目的地に持って行きよったです。もうその都度、測るわけだから、大変でしたねえ。丸1日で目的地に行けない場合もありました。もう探しきれんでねえ(笑い)。今は、もう魚探とか、GPSとか、便利な装備がありますから、ここは水深何百mとか、船は緯度経度のどの位置に来ているとすぐ分かりますから。

### イシマチャーから 針金曲げて、ヤマギタでやった

一本釣は、最初はイシマチャー(石巻落とし漁)、それからヤマギタに替わって、今の一本釣になっている。内地から親子サルカンが入って来たから、今は釣針を10本も、15本も付けるようになった。最初はイシマチャーですよ。(※イシマチャー漁法は安仁屋宗栄さんの稿参照)。これは戦前から、終戦直後も皆やってましたよ。釣針にエサかけて、石にくびって、この石をオモリにして、底に落して行って、底に着いたら直ぐ引っ張るから。そしたら石は外れ



石巻落とし漁法を改良した単体式ヤマギタ。針金を曲げて作る。真ん中に吊してあるのは石のオモリ。

て、あとは一本の縄とエサだけだから、魚の食い付きはいいですよ。

だけど、イシマチャーは潮がある時はダメ、縄は飛んでいくから。それに魚釣る度に石は捨てないといかん、石をいっぱい積んで行かんとできん。それで、それを改良したがこのヤマギタ式です。(ヤマギタ図を見せながら)、これは針金を曲げて作りよった。この両端にヨリカンつけて、上はキタナー(幹縄)に、下は道(幹)糸に、オモリの石は大体200から300グラム位、潮の流れにもよるが、潮が強い時は600グラムは付けた。オモリは、このヤマギタの真ん中、幹縄寄りに寄せてくびっている。オモリの糸の長さは大体40センチ位。だから、これは落ちて行っても、こういう風にエサの方を上にして落ちていく。オモリが底に着いたら止まって、ヤマギタは倒れて、釣り糸は底に、前に行くから、魚が食い付くわけ。それに、イシマチャーはオモリの石捨てるけど、ヤマギタは外れんから何回でも使えた。尖閣列島行ってこれでもやりました。最初の頃はよく、あとでも浅瀬では殆んどこれ使いますねえ。皆が休んで、自分ひとりやる時もこのヤマギタ式を。で、今の10本、15本も針付ける今の一本釣式は、魚が大量にいる時は効果があるが、そうでなければ、これ(単体式)を使いました。また1、2人起きている時とか、夜釣りの時は、これを使いましたよ。夜釣りの場合にも使います。



ヤマギタだとオモリを捨てなくてよい。尖閣列島でもこれで一本釣りをしたと話す國吉さん。

### キタナー 豚血で染める 釣針 米軍のワイヤー

だけど、このヤマギタは釣針は2本です。下の道糸にヨリカン付けて2つ枝出して、釣針は2本しかできないです。釣針を5本、10本も付けるとしたら、このヤマギタとは違う連結式になります。

(連結式ヤマギタ漁法は与那嶺三郎さんの稿参照)。

ヤマギタ1つ付けて、1メートル行って、また付けて、また行って、付けて、もう10本、15本も付けられますから。尖閣列島でもこの式も、どっちもやりましたよ。だけど、ヤマギタは自分で、針金を曲げて、作らんといかんから、それに鉄だとすぐ錆びるから、ステンを探して、そのあと親子サルカンが入ってきて、今の一本釣の方式(右図)に替わりました。すぐヤマギタやめて、便利だからと全部この式になりましたねえ(笑い)。

だけど最初の頃はナイロンがなかったです。僕が25、6になって入ってきたかなあ。枝糸に使うテグスイはあったが、キタナー(幹縄)と幹糸は、そのまま、戦前のまま、木綿と麻縄でやってました。キタナーの木綿



現在の深海一本釣漁法

は染めないと抵抗かかるから。真っ白い木綿糸のサユンナー、これを豚の血で染めましたねえ。この木綿糸を豚の血に漬けて、乾かして、また血に漬けて、乾かして、大体これを3回位したら、もうきれいに染まっている。今度はボロ布で、これを擦って、滑らかにしました。最後は、それをセイロに入れて蒸して、乾かせば、もう完全に硬くなるから立派な幹縄です。

もう海に入れても血は溶けないし、水も吸わない。表面もツルツルですから、潮の流れの抵抗も切ります。僕は親父と一緒によく作りましたから。幹糸の麻縄は強い、ヨリも入らないし、もつれもない、水分も取らないし、ツルツルして潮切るのが速いです。だけど、透明なナイロンと違ってキタナーは豚の血で黒いし、麻縄は光って見るし、魚に目立ちます。それでも尖閣列島で魚がいっぱい釣れましたよ(笑い)。魚は相当いましたから。

それに、もう当時は何も無い時だから、釣針も、針金を探してきて、自分で作りましたよ。ヤスリで先を研いでから、型作って、曲げて、リングを付ける人もいましたよ(笑い)。鉄はすぐ錆びるが、米軍のステンワイヤーだったら上等な釣針ができましたねえ。

### 米軍払い下げ 大部助かった

あの時分は、船の道具作るの材料も、備品も、何もかも、米軍の払い下げです。いろいろ恩恵受けました。オモリも、米軍のフルガニ(屑鉄)とか、鉛探して、フルガニは適當の重さに切って、鉛は溶かして、地面に穴あけて流し込んで、あとからは鉄筋が出てきたから、これ買ってきて、秤にかけて、1和、2和、3和と作りました。また船のロープも、ワイヤーも、軍作業に行つて、皆戦果を挙げてきて(笑い)。弁当箱も、水筒も、ナイフも、何もかも、米軍の払い下げを使いました、上等だったから。あの落下傘の絹糸、あれは抜群でしたねえ。ウチの五眞丸3号は暴風対策は全部あれを使いましたから。入札業者に頼んで、手に入れました。双眼鏡は、あれも全部アメリカ製を使いました。倍数が日本ものとは比較にならない、米軍用ですから。モーターなんかも、機械も、ウチのサバニも2台据えてエンジンを、3馬力位を2台据えてやりました。

そうそう海図も上等がありましたよ、もう1つ上等なのは潜水艦海図があつて、潜水艦が使う海図だからちゃんとされていて、海の底のソネは全部ある、ないとぶつかるから(笑い)。あれは長い間マグロ船する時も持っていたんですよ。魚は潮の流れでブラントンが集まるソネで釣れますから、それで潜水艦の海図を見て、このソネは、どこに、どの位の高さになっていると計算して、縄入れますから。もう米軍の払い下げは相当利用しましたねえ。僕らウミンチューは相当助かったはずですよ。

### いろいろ工夫 巻き揚げ機も エサ袋にヌカ殻も

あの時分は、アンカー揚げるのも、縄(釣縄)揚げるのも大変でしたよ、皆で手繰りでしたから。今はラインホーラーとか、釣機とかあつて、機械で、電動で巻き揚げるから楽ですが、もう何百メートルの深い海底から、アンカーだと60~45和はありましたからねえ。皆で手で揚げて。それで、いろんな工夫して、自転車のチューブ、古くなったものを探してきて、あの

ゴムを切って、広げて合わせて、針で縫って、それを手にはめて、揚げたんですよ(笑い)。また、内地船の電動釣機を見て、あれを真似して、手動の、手で回す釣機も造って、これを舷にボルトで付けて、長い間使っていました。何もない不自由な時だから、いろいろ工夫しました。(前掲の深海一本釣の図を示しながら)、道糸の天辺にサルカンつけて、ここにカブ(撒エサ袋)がありますねえ。三角のエサ袋、この中にエサ入れるんです。縄を入れる時に一緒に入ると、口が閉まったまま落ちていく、底着いたら、2 尋位揚げたり下げたりすると、逆さになって口開いて、中にあるエサが周囲に撒き散るから。これを食べに魚が集まって来て、針のエサを食うんですよ。だからカブグワーに粃殻も入れたねえ。何体かなあ、尖閣に行く時も 1 航海に 5、6 体位積んで行きましたよ。これと頭なんか切って、混ぜて、ご飯やお汁の余ったもの、食べ残しのカスもは全部これに入れて、全部混ぜてから、このカブに全部詰めた。効果はもう抜群です。魚はこれを食べるため、いっぱい集まってきましたよ。



自転車のチューブで掌当て作り  
これだと手繰りは少々楽だった。

### ゆっくり揚げるのがコツ 提灯行列みたい 魚浮く、

一本釣は、針は 10 本から 15 本位かけてますから。尖閣では、いい時はもう全部にかかります。もういい場所当たったら、オモリが 3 和以上もあつたら重過ぎて、今度は手で揚げきれんです。魚が 10 本位食ったらもうすごい重みですよ、それに潮の流れが速くて、あの自転車のチューブで作った手袋、あれが切れる位まで、手にかかりますから。だが、ある程度揚げたら魚は、自分で 100 メートル位向こうに浮いてきます。もう提灯行列みたいに赤くして、生きたまま、胃袋吐いてパタパタして回っています。その時は釣針から外れても、海の中に潜れんです。もう胃袋が出てますから。深海は大体抜けますねえ。アカマチとか、マーマチ、ヒラマチは胃袋が出るのは、速さによります。ゆっくり縄を揚げると出ないが、急いで揚げると、全部が出て、それに釣針が外れたり、切れたりしますから。

船の上では、キタナー(幹縄)入れたら、今何匹魚が掛かっていると分かりますねえ。

自分で縄を掴んでやっていますから、それで今幾ら食っていると判断して、自分で揚げ方を決めるんです。1 本だったら速く揚げて、急いで次の縄を入れんといかんから。3 つ 4 つだと、ゆっくり引いて、切れんようにして、揚げていきます。

魚は胃袋が吐き出さない状態がいい、値段がいいですから。魚を急いで揚げたり、暴れたりすると血管が切れて、肉質に血筋が出てくる。こういうのは市場で値段が安くなりますから。アカマチとか上等な魚は釣り上げると、柔らかいマットの上に置いたり、水槽とかにすぐ入れましたよ。もう船の上でパタパタ暴れると血管が全部散りますから。

### 避難中、月夜の晩 マーマチ 800 和 釣り上げる、

尖閣列島での 1 番思い出ですか、それは月夜の晩に夜釣りしたことです。縄入れてみた

んです。クバシマで避難していたら、夜中 12 時まで釣れましたねえ。マーマチが。それが月がきれいな夜だったので、よく憶えています。こういうのは宝山ソネでも 1 回当てています。大シケでも、避難しながらでも釣りはできます。北風が強くても、クバシマの南側は島陰になってますから。あの時は高気圧は 1023 ミリだからそんなにはシケンだろうという船長の勘でねえ、絶えず気象は聞いてますから。それによって波は何メートル位はあると、自分なりの判断で、あんまり島の浅瀬行くよりは、ここで一応釣るかもしれないから、ここでやってみようと、少し下の深い所に行って。それにあの時は、いつの間にここへ来たのか、地元船、内地船、台湾船がもういっぱいでした。昼間から避難して、皆アンカー入れて碇泊して、あれだけ船が、皆が、食べたご飯のカスとか、おかずのカスとか、全部流すでしょう、それが沈んでいきますから。もう全部の船から、昼間からですから。それしたらドンドン釣れましたねえ(笑い)。あの時一晩で 800 疋も釣れました。やっぱり、あの流したカスを食べに魚が浮いてきたと思います。あの時の夜釣りが一番の思い出ですねえ。

### 操業日誌 どこで 何が 幾ら 獲れたか つけていた

マグロ船乗っている時もそうでしたが、マチ船で尖閣列島行った時も、どの海域で、北緯東経の幾ら幾らで、何々が幾ら上がったとか、何回目操業していたとか、操業日誌を毎航海つけていたんですよ。潮の流れ、気象ねえ、天気はどうか、波は何メートル位あるとか、これが何冊も、この位あったんですが。もう海を辞めた時に、全部捨ててしまいましたねえ。一本釣の記録は、尖閣での操業日誌は、マグロ船に切り替えた時に処分しましたねえ。もう使うことないと思って、マグロ船のものは後輩が貰うものは全部上げたんですが。

あの時は操業日誌をつけていてよかったです。なぜかといえば 3 月 31 日にこっちに行ったら、来年のその日は釣れるんですよ、ここで。だから全部つけていくんですねえ、データーを。魚釣れん場合はですねえ。一年前のデーターも全部つけてありますから、開けて見て、ああ去年はこっちはダメだったなあ、今日もダメだなあって、じゃとまた調べて、別の場所は、日にちは、僅か変わるけど、漁がよかったようだ、と行って、また向こうに移動するわけよ。あんなしてデーターで全部行くんですよ、そしたら確実に釣れます。どこかで当るんです。この操業日誌は大事なものでしたが、もう使うことないからといって処分しないでとっておけばよかったですねえ。尖閣列島の海域でいつ、どこどこで、何々が、幾ら幾ら、釣れたかといういい資料になったはずですが。

### 内地の一本釣船 大陸棚に沿って 南下

今、那覇地区漁協で、尖閣行っている船はもういないですよ。若い人は皆大型化して、皆マグロやってますから、一本釣は 3,4 隻はいますが、皆高齢化して、年取ってしまって、行ける能力はあるんですが、行けんわけですよ。もう皆県外船が行ってますよ。こっちな那覇地区の港に入ります、こっちなで仕込みして、こっちなを基地にした鹿児島とか熊本の船が全体で 10 隻位いますけど、この船なんかは尖閣列島に行きますよ。時季的になったら九州から



段々南へ下がって、久米島からまっすぐノーイス(北東)かに行くとソネがあるんですよ。もう大陸棚の手前で、僕らも何回も行ったんですけど、アコウからこんなして大陸棚のソネを沿って行って、尖閣列島のフチミグーを全部探しながら漁して行きますよ。そして尖閣列島から与那国の所までずっと廻って行っているはずですよ。今は魚探とGPSを持っていますから、何でもできますから。こういう風に、大体冬場は南下して、沖縄近海、尖閣列島で操業して、ここに水揚げすると、夏場は、また戻って奄美大島、九州近海で漁して帰っていますよ。

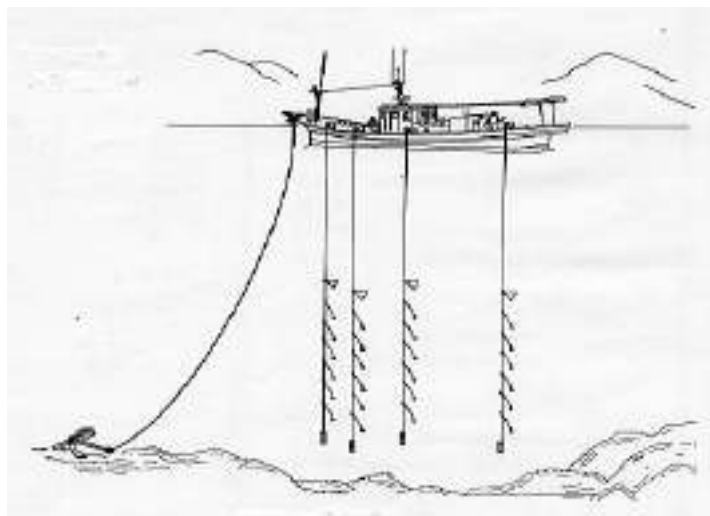
### 今はもう 昔のように獲れない

復帰前は、僕等の時代は、もうびっくりするほど釣れましたねえ。大概3日で満船し、3、4ト釣って5日で帰ってきました。ひと月に3回位航海しましたねえ。

もう、今は、1週間歩いてきて200和、300和とかいいいますから。あの当時同じ日数で3、4トでしょう、しかも航海もひと月に1、2回しか行かない。そんなに魚が獲れないかと、今の一本釣りを見ると悲しくなります。もう尖閣は昔の面影はないですね。もう禿げ山みたようになっています。あの当時は、宮古の宝山ソネでも、八重山近海でも、一本釣りで魚はどこでも多く獲れました。今ではどこでも獲れなくなっています。この数十年間でこんなにも変わりますかねえ。終戦後の頃から一本釣りをやっていますが、その頃はやる人は僅かでした。ここ(那覇地区)でも少なかったです。

それが一本釣りは儲かると聞いて、尖閣列島へ行けばいっぱい釣れると聞いて、ウチらもやろうかといって、あれから広がっていったんです。ここからも、他所からも、尖閣に交互に押し掛けて行ってねえ。戦後67年経ちますが、50年で計算してみても、もう大変な数になります。成長するのと獲るのが合わず、尖閣にも魚がいなくなるは当たり前ですねえ。だけど、今は、県や国が、マチ類の禁猟区を決めて保護していると聞いてます。

昔のように尖閣列島が豊かな漁場になり、魚が回復できればと願っています。(了)



深海一本釣りの図 (「沖縄県の漁具、漁法」より)

## 与那嶺 三郎 よなみね さぶろう (那覇地区漁協)

1925年(大正14年)、那覇市垣花に生れる。88歳(2013年時)。

15,6歳(昭和14,5年)の頃、飯炊きとして、豊祥丸に乗船して尖閣諸島に一本釣漁に行く。終戦後は25歳(昭和26年)には株仲間で船を拵え、本格的に漁業に従事する。46歳(昭和45年)には第八幸丸(13ト)建造 尖閣諸島で深海一本釣、底立延縄に専念。のちマグロ船を建造、マグロ漁を専業して75歳で引退する。今回、氏には戦前・終戦直後において使用されていた深海一本釣のヤマギタ式漁法の漁具を作って頂き、同漁法の話をお聞きした。



## 垣花は釣漁 糸満は網漁

ウチは垣花で生まれた。戦前の垣花は海の仕事が盛んだった。昔は糸満は釣船はいなかったですよ、皆網使った漁法で。この垣花は釣漁で糸満と並んで漁業が盛んだった。那覇港があるし、水産学校、氷会社も、組合の市場も、造船場もあったし、カツオ工場もあった。船は30隻あまりじゃないかねえ、数えては見ないが。年寄り達はユクン(尖閣諸島の通称)のことはよく話していたが、もう向こうは遠いから大きな船しか行かなかった。その時分は小さい船が多い、皆イシマチャー(石巻き落し漁)とか、スクフェーナー(底延縄)とか、またチンブクジケー(ホテイ竿釣)といって、イェクワーシー(魚食わし)といって、小さい魚、クサバー(ベラ類、雑魚の意)とかねえ、あれを舟で獲るお祖父さん達が沢山いたよ。それで皆飯食っていたから。ウチの父はイザイ(漁り)といって、夜灯をつけてから、ヒシで貝やタコ採ったり、エビねえ、小さなエビ、これはサバニを持ってフェーナーしている人がこれを買うよ。残ったものは町に売りに行く、そんな海の仕事をやっていた。小さい頃からそれ見ているから漁師になった。13,4から船に乗って 最初は飯炊きですよ、兄貴達の(笑い)。もう1人前になったのは17からですねえ。その時から配当は同じようにくれよった。

垣花には氷会社があったから、ウチ達は氷持たされてねえ、2人で氷を捉まえてから、1人はカシガー(かます)掛けて、はいと、肩ヌシキティ、こんなして氷担いでやっていた(笑い)。船に足場かけているでしょう、落ちないか、もう怖くて(笑い)、ウチ達は小さかったから。もう昔は大変だったねえ。今の漁業は皆機械でやるから、何の心配もないし、天気予報も、無線も、レーダーもあるから。昔は何もない、だからカジマーイ(風廻り)には、タンメーター(老人達)がいなくなったのは多かったよ。2月カジマーイとか、その時には。

## 15,6歳 飯炊きで 尖閣へ行く

ウチは15,6歳で尖閣列島に行ったよ。もう70年前のことだけど、戦争が始まる前の昭和14,5年(1939,40年)の頃だった。イーバンガシラ(伊江島の番頭)グワー(接尾語、愛称の意)のカーカンメー(屋号)の我那覇の船から、豊祥丸から。その時は7,8名位、船は13ト位の船、1航海で10日位かかったかねえ。こっち(旧那覇港)から出港するでしょう。すぐ久米島に着けて、そこで時間つくってから、夜中、アコウ(大正島)に夜明けに着くように、船

走らすんですよ。コンパスで方角を見て、向うは潮の流れが強いから、必ずアコウを見てから、そこから尖閣に方向をとりました。アコウから魚釣島までは何もないから、ただ勘とコンパスだけです(笑い)。で、着いたら、島見ているから、それで山当てして、漁場を決めると、縄にオモリ(錘)を付けて深さを測ったりしてねえ。その時はイシマチャー(石巻落とし漁)じゃない、一本釣ですよ。「トー、ヤマギタ(山型?)グワー、入りレー」と言ってねえ。ヤマギタを使って、一本釣をしましたよ。でも、ウチは飯炊きで行ったから、させて貰えなかった。もう兄貴達がやらすのねえ、漁業習い初めで、こんなして手繰ることはできよったから、手繰ったりして(笑い)。魚釣島のすぐ近くでやりましたねえ、あの時はやっぱりシチューマチですねえ、アカマチは獲らない。もう手繰いだから、揚げるのが大変、だから深い所はあまりしなかったねえ。

### イシマチャーから ヤマギタに 魚 何倍も獲れた

豊祥丸で行った時は、もうヤマギタだけで、イシマチャーする人はいなかった。石積まんといかんし、石がないからできない(笑い)。ウチらの頃は終わってましたよ。皆ヤマギタに切り替えてあった。だからイシマチャーは全然やらん、やったことない。豊祥丸で行った時は14,5歳だから、昭和14,5ですねえ。この時には全部ヤマギタになっていた。

その前は分からん。イシマチャーだったら小船ですよ。垣花にはサバニがいっぱいいたから、オジー達はそのサバニでやりましたねえ、チービシから慶良間方面まで行ってねえ。ヤマギタに替わったら、もうイシマチャーの頃とは比較にならない。魚はもういっぱい獲れたはずですよ。イシマチャーは針は1本、ヤマギタは10本も付けるから。

最初は自分達がやる時は5本位付けて、あんまり多くすると、傍のものに掛かるからよ。だけど、先輩達は7,8本も、多い時は10本位も針付けよったですよ(笑い)。魚が食ったら、すぐには揚げないですよ。縄を握っていて、今1つ食い付いた。また1つ食い付いた、もう1つ、もう5匹は食い付いていると、大体分かる、勘でねえ。で、いい時分食わしてから、皆揚げましたねえ、したら、いっぱい獲れるから。(笑い)。イシマチャーに比べると、何倍も魚獲れるから、それにヤマギタは、船に石を積んで行くかなくてもいいからねえ。

### 銘々で 針金 曲げて作った

ヤマギタは、自分の道具だから、皆銘々、針金で作ったですよ。戦前もヨリカンがあったから。ヤマギタはヨリカンと針金があったら作れた。針金といっても硬いワイヤーよ。この位のワイヤーが縄巻くように巻かれてあって、親方がこれとヨリカンを買って、「はい、これで作りなさい」と、それはまた経費に入れるからねえ。ワイヤーを切って、手ではできない、硬いから、これは道具を使って曲げてから作りよった。で、



ヤマギタは、銘々こうして道具を使って針金を曲げて作っていたよと話す与那嶺さん。

ヤマギタには、1本でやるのと、幾つもつないでやるのがある。1本式は釣針は2本しか付けられん。(単式ヤマギタ漁法は國吉眞一氏の稿参照)。尖閣行った時は、ヤマギタをつなぐ式でやりましたねえ。これを上手に作ろうと思ったら、曲げる道具は、堅い木で、樫とか、イークとか、丸太棒を切って、これに釘2本打って、釘もしっかりしていないダメですねえ。ヤマギタは紐が切れて失くす場合もあるから、その時は、予備も入れて、2、3航海分までまとめて作ったねえ。20個から30個位作りよった。もう30個もあれば十分よ。最初は、針金を曲げて、釣り糸と釣針を付けるもの(Y字型)を作るんですよ。これは二股の枝に2つ耳作って(輪状に曲げて)、幹は30センチ位伸ばして、先に耳作って、ヨリカン付けて、その先に釣針を付けます。



連結式ヤマギタはY字型(右)とI字型(左)の組み合わせ、これを5~10つないで使用した。

次はヤマギタ同士をつなぐもの(I型)ものねえ、これはこちらの2つの耳に、針金を通して、その両端を曲げて、耳作れば出来上がり。あとは、ここの2つの耳から紐通して、ヤマギタ同士をつないで行きますよ。つないだ紐が纏れても、擦れたりしても、これが自由に回ってヨリカンみたいになっているからうまくできている(笑い)。これを幾つもつないでやりますよ。大体5本位つなぐが、上手な先輩になると10本、15本つないでやる人もいましたねえ。また、ここは魚はいるなあと思ったら、すぐ外してまた追加してねえ(笑い)。



2つつないだ手本を示し、連結式ヤマギタに替わったら「魚が何倍も獲れたよ!」と説明する与那嶺さん。

他所のものと同引掛かったら、すぐ揚げて、取って外して、また別のヤマギタを付けて、すぐやれるから、これは便利でしたよ。

### オモリは石で キタナー 豚血で染めた

一番上にキタナー(幹縄)があって、その下にカブ(撒きエサ袋)もある。ヤマギタとヤマギタは大体1メートル30から50センチ位は離して紐でつないだ。釣り糸は30センチ位だった。

ヤマギタをつないだ一番下にオモリをつけてねえ。重さは1kgはいかない。オモリの紐は別個に付けるんですよ。ヤナ(海底のサンゴ礁)に掛かったらすぐ切れるようにして、やわいものを付ける。オモリが切れたら、ヤマギタは全部揚がってくるから。だからオモリは予備を4、5個位は巻いて持っておく。慣れない人はよけいに入れて、ヤナに引掛けるが、先輩達は着くのは分かるから、すぐ揚げて地面に掛かからんようにする。

戦前は木綿糸を持ってきて、これを豚の血で染めて、あとは黒くなるよ。血で黒くなくても、魚は寄り付いたからねえ。その時分は魚は多いから、どこいっても魚いるから、すぐ食い付いたよ。釣り糸はテグスイを使った、テグスイは絹糸だから高かった。

戦後は三叉サルカンが出て、いろいろな道具が出てから、ヤマギタはやめているよ。

ヤマギタは、魚にしたら障害物だよ、もう目の前にぶら下がって、邪魔だから(笑い)。

それでも、魚が食ったのは、いっぱいいたから。今ならとても食わないねえ。今の一本釣は、ナイロン糸を使って、透明だから、魚をうまく騙せるからねえ(笑い)。

### 先人の知恵 カブで 魚寄せ集める

ヤマギタを入れる時、カブ入れよった。(カブ袋は國吉眞一氏の稿参照)、三角形の撒きエサ袋ねえ。ヤマギタの一番上に付けるさあ。これも自分達で作りよった。布切れを三角形に折り曲げて、大きさは6,7寸位かねえ、これを針で縫って、三角形の袋にすればできますから、簡単ですよ。カブグワ―は底に着いたら 脱げて、エサ撒く仕掛けになっている。それを食べに魚が寄って来るさあ。これ入れるから、魚はよく釣れるさあ。簡単な仕掛けだけどよく考えている。先輩達の知恵だ。これに色んなものを入れよった。一番は米の粃殻と魚のエサを起した頭とか、搗いて混ぜたものを。ヤマギタを入れる時、カブの口の方を、捉まえて一緒に入れる。そしたら速く落ちて行く力と潮の抵抗で、口は閉じたままで、下に行くから、カブは脱げない。下に着いたら止まって、すぐ横に倒れるから、カブは口開いて脱げて行くよ。縄をちょっと上げて、落す、これを2,3回やれば、底から脱げて行く、エサはもう全部撒き散るから。カブは途中で脱げたと思って、魚を釣ってみると、下でちゃんと開いて、魚が食っているねえ、粃ですぐ分かる。魚のエサだけだと分らんが、魚の口に粃殻がくっ付いているから。それにしても先輩達の知恵はすごいねえ

### オモリの石 慶良間に採りに行った

戦前のヤマギタグワ―のオモリは石を使った。終戦後は鉄筋の切れ端でやったが、石に針金巻いてオモリにしていた。一番いいのは、慶良間のヤカン(屋嘉比島)という所の石、ヤカンは銅が出るんだよ。昔は銅を採っていたというが、その作業納屋は見えないが、その海のハンタ(傍ら)の石で、この石はまた重いよ、普通の石よりは。同じ大きいでも比べたら重いさあ、銅が混ざっているから、1和とか、2和とか、3和位かかる石を、探してきて、オモリにしよった。だけど、ヤカンの石は、重い重い、丸みのもの、形のいいものがないですよ。ヤカンの南にクボウ(久場島)といって、そこは形のいい石があった。それで、皆大体ここに採りに行きよった。ちょっと細長くて、形がいいから針金で巻いたらすぐできるから、これをオモリに付けてやっていた。このものは普通の石より重いさあ、あれはマジントウ(緻密な岩石)といって、沖縄(本島)の石とは違うねえ。また、イシマチャーに使う石は、慶良間辺りから採りよった。クボウとか、ギルマ(慶留間島)とかにねえ、これは1和位の小さい石でいい。ウチ達はイシマチャーはしない



慶良間諸島、前より屋嘉比島、久場島。  
 (「ウェブサイト」より)

から、ヤマギターの石だけを採っていた。

### 大シケで 魚釣島島陰へ 避難漁船 垣花船 4,5 隻

ウチは、戦前は豊祥丸に乗ってしか、尖閣行ってない。行ったのは2,3回ですねえ。

1度は、向こうで、天気が悪くなり、大シケになってから、高い山があるでしょう。魚釣島ねえ。北風だから、あの山のカタカ(島陰)に、避難しましたよ。先輩達は昔から分かってましたねえ。向こうで波が荒くなったら、すぐ向こうに避難しましたから。船は見えないけど、天気が悪くなったら、あっちこっちからも、船が避難しに来よった。全部で4,5隻ばかり来ていたねえ、もう皆垣花の船だけですよ。

戦後になって、ウチ達がフェナー(底立延縄)で行った時は、台湾船が来よったけど。復帰した後からは中国船も(笑い)。中国の網船が。だけど台湾も、中国も、ワッタームンドヤル(俺達の島だ)と言っている。ナー、ガーハティ(もう我を張って)、あれはおかしいよ(笑い)。

戦前は、台湾船も、中国船も来なかったのに。他所の船もいなかった。皆垣花の船だけだった。そうねえ、あの時は垣花のどこの船が、何丸が来ていたかは分からんねえ。自分が乗った豊祥丸しか知らない。ウチは子供だったから(笑い)。

避難しに来たのは4,5隻でしたねえ。あっちこっちに見えよったから。

尖閣で魚獲ってきたら、垣花の市場に持って行っただ、1度は、この豊祥丸で、八重山、与那国近くのソネで漁してから、台湾まで行きましたよ、魚売りに。ヒラマチとって、アカマチとは違う、長くはないが、丸みがあって7,8和から10和位の魚を、これを2ト位持って、台湾スオウに行ったら、もう値段が安くて。アカマチはよけい大変だった。こんな魚は見たこともないと言うて(笑い)、それですぐ帰って来たけど。

### 鹿児島 シチューマチ 4 倍値 皆北の海へ

それからあとは、17になったら企洲丸とって、カーラブチグワー(屋号)の國吉さんの船に、兵隊に行くまで乗っていた、ヤマギタの一本釣船に。この一本釣船の企洲丸は、昭和17年から19年の10・10空襲までやっていたが。この頃には、八重山辺りに行っていた、尖閣にはもう行かんですよ。なぜなら、鹿児島ではシチューマチは高く売れるというので、ムル(皆)北の海に行っていたから。だから、ウチ達も、大島辺りによく行きました。もう鹿児島では、シチューマチは、値段は4倍もしたから、皆、大島に来ていたねえ。

あの時は、鹿児島はシチューマチは高いが、アカマチは安いよ(笑い)。シチューマチばかりになったら鹿児島に行った。あっちではホタとっていた。色んな魚持って行っても、売れるのはシチューマチだけ、それ以外は、アカマチ獲ったら、大島に持って行って売った。沖縄では高かったけど(笑い)。もう、何だねえ、企洲丸で大島に行ったら、やがて半年位は、沖縄に来なかったねえ。大島から、エサ、氷なんかを積んで、沖に出て、魚釣って、魚は鹿児島に持って行って、また大島に戻って、また漁に出て、こんなにしよったですよ。

## 戦後、大島で底立延縄 大漁に驚く

20歳で兵隊に行って、武(たけ)部隊で台湾に行って、戦後復員してきたあとは、外間の船から雇いして歩いていた。一本釣のガリオア船で15ト位の船だった。その時は尖閣には行かないですよ。して、25歳頃からは仲間6、7名で、共同で、中古船買って、幸丸と名づけてこれでやりました、これが古くなったから新造船を造って、豊泉丸だったかな。これで一本釣したり、マグロ延縄やったりしたおつたが、沖縄近海から、宮古、八重山、大東島辺りです。

ウチが尖閣行くようになったのは、47歳(1970年)に、自分で独立して、第八幸丸(13ト)を新造し、自分の船を持ってからですねえ。この船で尖閣行きました。一本釣とか、スクフェナー(底立延縄)でねえ。鹿児島島の船が、大島の近くで、ものすごく大漁していた。これを渡慶次次郎さんが見てから、「底立延縄は上等よ、あれしてみよう」といって、それでウチ達は真似したんです。最初は渡慶次さんの慶豊丸とウチの第八幸丸の2隻だった。残りはもう一本釣だから。だが、これなら、魚獲れるといっって、皆ウチらの真似をしたんですよ。最初の頃は、慶良間のルカヌフェーで、シチューマチとか、アカマチとか、獲った。相当獲れたもんだから、もう4、5日で2千斤位も。それに海も近い、日戻りできる距離。慶良間の南側だから、皆こっちに来て、皆で獲った。それでもう、魚いなくなっている。自分1人だったら、相当獲れたねえ(笑い)。あそこは今につけても食わないというから、その位相当獲ったんだよ。それから、宮古、八重山近辺に行って、そこでやって、皆もやって、魚いっぱい獲って、そしたら魚はいなくなっているさあ。それで尖閣に行った(笑い)。



アカマチを釣り上げる、釣針5本で3尾釣り上げる。場所は宮古の宝山ソネ、豊泉丸の船上にて

## 尖閣で 底立延縄漁 専門に

尖閣は誰も行ってないから、海はまだいいだからねえ、魚がいると思って、あっちは一本釣では皆行きよつたが、それでは埒はあかんさあ、これでやったら、もう全部掛かってきてよ、相当獲れたよ。アコウから、魚釣島から、トリシマから、島の周辺近く、もうあっちこっち廻ってやって、相当獲れた。

1航海で、その時分は斤だから、3千斤(1.8ト)とか、4千斤位(2.5ト)は獲れた。4千斤位なら1番大漁だったねえ。この時はマチ類は、売りもよかったから、すぐ那覇に帰って来て、ここで水揚げした。宮古や八重に着ける場合は天気が悪くて、避難の時だけだったねえ(笑い)。



1970年、第八幸丸(13ト)新造、尖閣諸島で深海一本釣を操業、のち底立延縄に切り替える

魚はタイとか、マーマチの大きいもの、7,8 和のものが獲れた。主にマーマチめがけてやりよったから。シチューマチはシルシチュー、アオもあるが、シルーが。それに大きなタイも、あれは何タイかなあ、沖縄近海にはいないタイだ。これが大体 200 メートル位の浅瀬でねえ。アカマチも獲れた。アカマチは 250 メートルから 300 メートルで、これは 300 メートルまでできたから。また、魚釣島のニシ(北)の方に、ニシジマ(久場島・黄尾嶼)とってある。そこには寄りはないで、その近くでやったが、いろいろ獲れた。マーマチとかねえ、ハーゲー(浅場)があつて、その辺に上ると、シルイユとかが釣れよった。タイとかも、マダイかねえ、4、5 和位もかかるタイが。

### 魚は相当獲れるが 大変だから やめた人多い

この底立延縄というのは、丁度一本釣があるねえ、これを海の中で横に幹縄を引っ張って、それに一本釣の下がりねえ、枝縄をいっぱい下げて、それに針かけて、魚を獲るんだよ。(※注 底立延縄漁法は渡慶次次郎氏の稿参照)。

この枝縄は 30 本以上、それ針に 5 本は付いているから、魚は大部獲れるさあ(笑い)。

この幹縄は大きな浮き付けて、目印に旗を立ててある、ウチ達は旗は 3 つ立てたけど。この旗から旗の間はどの位あつたかな。枝縄と枝縄の間は 20 メートル位だつたか、もう忘れてしまつたいるさあ(笑い)。これを最初やる時は魚探で底の深さを測って、何メートルといたら、浮きをしめてから、浅くなつたら、くびつて、深いと、また伸ばして、枝縄を調整していくわけですよ。糸満の底立延縄は、ウチ達が始めてずつとしてから、こっちのものを真似したか知らんが、あとからやっている。ウチ達がやっていた時分、尖閣で糸満の船で底立延縄していたのには遇つたことはない。皆、那覇地区だけでしたよ。

この旗式は、魚は相当獲れることは獲れるが、大変だからとやめた人も多い。縄を揚げるのにも、相当時間が掛かつて、縄も失くなるしねえ。これが瀬に掛かつたら、もう取れないよ(笑い)。いっぱいいっぱい巻いたら、あとは切れて揚がつて来るからねえ、それに尖閣は潮の流れが速いから、オモリがよく切れるんだ。だからオモリは、いつも沢山準備しておかんといかん、それがないと仕事できんから。それで最初は、ベニヤ板で型枠組んで、それにセメンを流して固めて作りよった。1 和位のオモリを、自分で何千個もよ、もうこれが大変だつた(笑い)。その後から、皆建築するから、鉄筋屋ができて、そこに鉄筋の切れ端が、曲がつたものとかが、沢山あつたから、少し楽になつたねえ。

鉄筋の切れ端を買つてきて、それを切つて、オモリに使つたから。

尖閣に小さなフグがいて、あれが釣針の糸も、幹縄も食うよ。エサのカスが何か引っ付いたら、こっちはもう食べられて、縄も食い千切つて、あの小さなフグ、たまには釣針に掛かってくるからよ。だから縄を切るのもフグだなあと直ぐ分かるんですよ。エサ食ふるといって、切るんですよ、歯はかみそりと同じだから、すぐ切れるんだ、食い千切るんだよ。もう尖閣にはいっぱいいる。また、あのカワハギもエサを盗りますよ。揚げたらもうエサは皆ないでしょう、そしたらセンスルーカージャーがやっていると分かるから。



このフググワー(小フグ)やセンスルーがいると、仕事はできん、すぐアンカー揚げて、他所に移動する。もう、移動、しょっちゅう移動で、大変でしたよ(笑い)。

### 中国底曳船団 大挙押し寄せる 仕事できず逃げ去る

ウチ達は、尖閣列島には上陸したことはない。トリシマには鳥がいっぱいいるから、台湾人が上陸して鳥の卵を採りに来よった。それを食べるためか、売るためか知らんが、相当の卵を採って持って行きよった。台湾船は大体サンゴ採りに来ていたねえ、南の方に。あれ達は魚が獲れない時は、サンゴ網曳いたり、代わる代わるして、一本釣もやっていたし、すぐ見てサンゴ網船と分かった。あそこはサンゴは採れん、あれは相当深くないと、200メートル以上ならんと、山があって、その裾の辺にあるはずだが。日本復帰したあとは、海上保安庁が尖閣を警備するから、台湾船が来たら追っ払っていたよ。

だけど、ウチ達が尖閣列島に行った時はもう中国船がいっぱいよ。中国の網船が、曳き縄船が、こんなして網で、島(の傍)からすぐ網入れていたから、もう仕事できなかつたねえ。ウチ達がやる所は、もういっぱいいるから怖くて仕事はできない、20隻か30隻位だったですよ。船は大きかった、200ト位あったかなあ、小さいものから大きいものもいたから。

昼よ、向こうに着いたらいたんですよ。丁度トシマグワー(南小島)の西辺りを、あれ達はやっているから。怖いから仕事しないで、すぐ逃げて来た。その時にウチ達も、カワハギがいっぱい海に捨てられていたのを見たよ、もういっぱいよ、小さなセンスルーカワハギねえ、海に死んで浮いていた。網から出して、捨てたはず。

もうあれだけの網船だから、もう海は網で全部曳かれて、魚は獲られているよ。それから魚はあんまり釣れなくなっていたから。それで、尖閣での底立延縄にあまり期待できないからと、そのあとからは、向こうには行かなくなりました、尖閣行くのは辞めて、一本釣に切り替えて、近海とか、大九・宝山とか行って、そのあとマグロ延縄をやりました。

### 長嶺のオジー 昔 尖閣でカツオ製造やった

昔、尖閣でカツオ製造やっていた人が。ウチの家内の従兄弟がいた。もう亡くなっているけど、生きていたら100歳余りになる。長嶺三郎といって、ウチ達によく来た。ウチもウミンチュ(海人)でしょう、「キミ達は向こうに行くか」と聞いて、それから話が出て、「尖閣に行ったよ」と、「ウチも若い時、魚釣島のカツオ製造工場にいて、向こうで仕事やっていた」と言っていた。あの時はカツオ製造する工場もあったって、ウチ達は海の仕事で、向こうは陸のワザ(技・仕事)だから、ウチはあまり分からんから。

長嶺のオジーとはただ会える時にちょっと話をして、若い頃に行ったということだけしか憶えていない。誰か他所の人が憶えていたらいいけど、でもあれから長らくなるから。

当時は元気でしたよ。ウチは毎日沖だから亡くなった時も分からん、船入港したらもう亡くなったと聞いてから分かったんです。オジーのことをもっと知るの難しいですねえ。子供はいないし、もう大部経っているから、それにあの頃の人は皆亡くなっているから。あの

時分、魚釣島のカツオ工場に雇われて行ったはずだが、八重山からが多く来ていなかったかねえ、垣花の人も行ったんだけど。垣花の人は昔は相当ワッキレて(島外へ分散、雄飛の意?)行っているさあ。伊江島とか、伊平屋とか、八重山とかねえ。あの豊祥丸、ウチが戦前、尖閣に乗って行った船の船長はイーバンガシラグワー(伊江の番頭)という屋号で、お祖父さんが伊江島帰り。また隣近所にエーマジマグワー(八重山島)という家もある、お祖父さん達が八重山戻りの海人だから。

### マグロ船で、新南群島、パラオ、インドネシアへ

第八幸丸でしばらく、一本釣していたが、57歳(1981年昭和56年)には、ファイバー船のマグロ船第十八幸丸(20ト)を新造した。これで新南群島(南沙諸島)まで行った。漁していたら、たまには中国船に警告される場合があったかねえ。ウチ達は縄でマグロだが、糸満の人達は、昔はここに潜って貝殻採っていた島ねえ。あつちはもう瀬だから、ハーギ(浅場)が沢山あって、曲がってあるから危ない。糸満の船でもなかなか行ききれんからねえ。

ウチが船長して7、8名位で行って、島の後ろの深い所でやって、大体15ト獲ったら帰ってきた。新南群島は1航海大体1ヶ月位で、水揚げは14、5ト位でしたねえ。あそこで釣れなくなったから、今度はパラオの南、3度線まで。陸の仕事していた長男も一緒にやるようになってねえ。あの頃は南に行ったら20ト位は獲った。1航海1ヶ月位で、たまには40日かかる場合もあったが。もう、ウチは75で隠居するから、子供達にこの事業を継ぐかと聞いたら、やると言って、長男英誠(56)と次男雅則(54)が、海の仕事を継いでいる(笑)。

2002年(平成14年)には、新造船翔英丸(15ト)を造って、南で150度、160度位、日本海周辺で、マグロ漁して気仙沼に水揚げしている。乗組員は7名、船長と機関長は息子達で、残り5名はインドネシアの青年ですよ。ウチらがやった時に比べて、今は大部楽にはなっているが、それでも乗組員は探せない、なり手がいない。だから皆インドネシアの青年、もうインドネシアの青年達がいないと、マグロ船はやっていけないですねえ。(了)



豊泉丸の竣工式  
1960年  
船を背に家族親  
戚一同集い船の  
門出、幸先を祝  
う。右3人目の赤  
ちゃんは長男英  
誠さん。50年前  
の懐かしい光景

※「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告  
—沖縄県漁業関係者に対する聞き取り調査— 2012年」(2013年刊)  
「Ⅱ聞き取り編 1章 沖縄本島地区 那覇地区漁協」より転載しました。